（信州大学留学生センター紀要第７号　2006年３月）

長野県上伊那地方の方言終助詞「ニ↑」の意味分析

中　村　純　子

キーワード：方言終助詞、意味分析、ニ↑、ヨ、ジャン

要旨

長野県上伊那地方で使われている方言終助詞「ニ↑」の意味を、「ヨ」、「ジャン」と比較し、明らかにすることを目的とする。「ニ↑」は聞き手が共通認識を持ってしかるべきだという文脈で、聞き手の共通認識の欠落に対して、話し手が共通認識を要求する標識である。「ヨ」は「ニ↑」と同様、話し手と聞き手との間に認識のギャップがあることが前提にあるが、聞き手に対して、「共通認識を持ってしかるべきだ」という話し手の意識はない。「ジャン」は「ニ↑」、「ヨ」とは逆に話し手と聞き手の認識のギャップがないことが前提となっている。

１．はじめに

長野県上伊那地方（地図参照）[1]では共通語の「よ」相当の終助詞として、方言形式の終助詞「ニ↑」が使われている。

「ニ↑」の働きについて、馬瀬（1980：240）は次のように指摘する。「「ニ↑」は文末にあって軽い敬意と親愛の気持を込めて余情を含む確認を表す。男女ともに使うが女性に多い」。また福沢（1980：388－389）は「「ニ↑」は強引な主張ではなく、哀訴であり、愛嬌になっている。伊那谷の女子たちはしきりに「ニ↑」を使用する」と述べている。また、『日本方言大辞典』（1989：Vol 2 .1779 ）において「「ニ↑」は文末にあって感情を添えたり、強調したりする意を表す」と説明されている。中村（1996：30－34）は、上伊那地方の高校生の談話を基に、「ニ↑」は男性よりも女性に多く使用されていることを報告している。その理由として、それが女性言葉の特徴―女性は発話を強調し、自分の感情を相手に伝えようとする（Lakoff、1975:56－57）―と通じると論じた。

このように従来の研究から「ニ↑」は共通語の「よ」と同じように、主張や確認などの機能を持っているが、それだけでなく、話者の感情的な意味合いをも伝える終助詞である事が窺える。伊那地方では「ニ↑」の他に共通語の「よ」に対応するものとして「ヨ」も用いられている。また「ニ↑」とニュアンスは異なるものの、一部共通の機能を持つ「ジャン」も使用されている。これらを踏まえ、本稿では、「ニ↑」の意味を、方言の類似表現の「ヨ」、「ジャン」と比較をすることにより明らかにしたい。

2.「ニ↑」の文法的振る舞い

共通語の終助詞「よ」相当の方言終助詞の意味を詳しく論じたものに、井上（1995）がある。井上（1995）は共通語の「よ」はあらゆるタイプの文、平叙文・勧誘文・命令文（命令文・依頼文・禁止文）・疑問文のいずれにも付加する汎用終助詞であることを指摘した上で、富山県砺波方言の終助詞「ヤ／マ」、「チャ／ワ」について、「ヤ／マ」は命令文専用、「チャ／ワ」は平叙文専用の終助詞であることを指摘している。「ニ↑」は、「チャ／ワ」と同様、平叙文専用の終助詞である。また、「チャ／ワ」と同様、平叙文でも「ラシイ」、「カモシレン」などには付加可能だが、「だろう」相当の方言形「ズラ」、「ラ」には付加できない。

（以下、方言形はカタカナで、共通語形はひらがなで表記する。）

アノ家ノ息子ハ、東京ヘ行ッタッキリ、ヘー帰ッテコネーラシイ<u>ニ</u>↑。

アノ家ノ息子ハ、東京ヘ行ッタッキリ、ヘー帰ッテコネーカモシレン<u>ニ</u>↑。

＊アノ家ノ息子ハ、東京ヘ行ッタッキリ、ヘー帰ッテコネーラ<u>ニ</u>↑。

（あの家の息子は、東京へ行ったまま、もう帰って来ないらしいよ。／もう帰って来ないかもしれないよ。／＊もう帰って来ないだろうよ。）＊は不自然な文であることを示す。

また、共通語の「よ」は終助詞の「ね」、「な」を下接するが、「ニ↑」は他の方言終助詞を下接しない。このことは「ニ↑」が伝達態度のモダリティを担い、しかも話者の態度を最終的に決定する事を示している。

財形貯蓄なんか簡単に解約してくれるんだ<u>よね</u>↑。

財形貯蓄なんか簡単に解約してくれるんだ<u>よな</u>↑。

＊財形貯蓄ナンカ簡単ニ解約シテクレルンダ<u>ニネ</u>↑。

＊財形貯蓄ナンカ簡単ニ解約シテクレルンダ<u>ニナ</u>↑。

また「ニ↑」は常に上昇調で発音される。このことも話者の態度を最終的に決する終助詞であることを示している。

これらの文法的特徴を考慮に入れて次節以降「ニ↑」の意味分析を試みたい。

3.「ニ↑」の意味分析

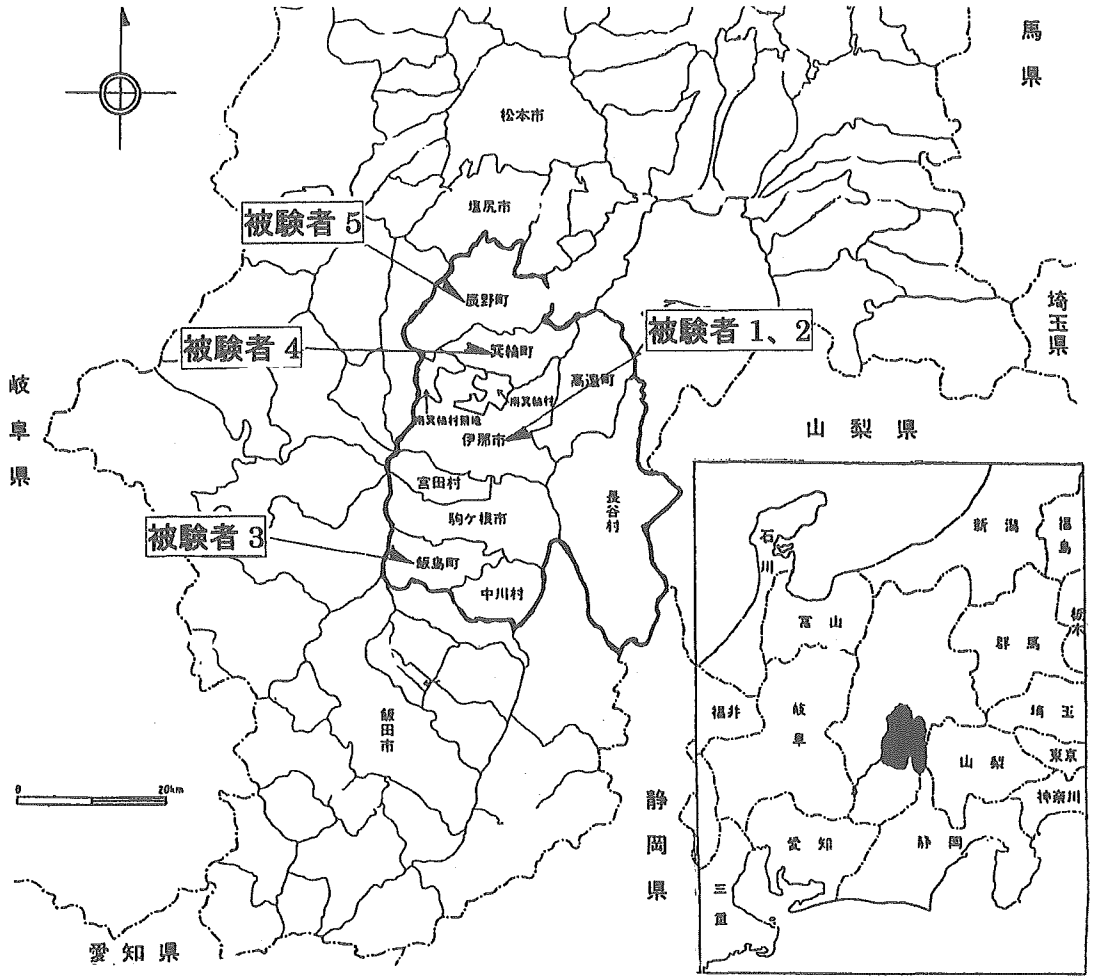
論者は1957年、長野県伊那市生まれ。大学からの論者の言語経歴は以下のようである。

1976－1980：東京都国立市、1980－1988：神奈川県厚木市・東京都、

1988－1993：米国、1993－1997：長野県駒ヶ根市、1997－現在：長野県伊那市

分析は論者の内省に基づく。分析の際用いる文は作例もあるが、生え抜きの話者の談話資料[2]も用いている。また、井上（1995）、蓮沼（1995）の分析・例文も参考にしてある。

【上伊那地方地図】



3－1.「ニ↑」の基本的意味

「ニ↑」の基本的意味は以下のように考える。

聞き手が共通認識を持ってしかるべきだという文脈で、聞き手の共通認識の欠落に対して、話し手が共通認識を要求する標識である。

聞き手が共通認識を持ってしかるべきという文脈で用いられるので、聞き手の共通認識の欠落に対しては、しばしば話者の心理的な抵抗が感じられる。

3－2. 主張

「ニ↑」が典型的に用いられるのは、共通認識が損なわれている場面での「主張」の機能である。以下の（1）、（2）は生え抜きの話者の会話を録音、文字化したものである。

（1）（被験者番号1（A）、2（B）の談話資料より）

A：「オイチャン、ソレモヤルノ。素敵ダナ。」（「おじさんは、それもやるの。素敵だな。」

B：「エエ、カラオケヤッテ、恥ズカシイ。」(「ええ、カラオケやって、恥ずかしい。」)
A：「ホイダモンデ、モテルノエ。」(「それだから、もてるんだよ。」)
B：「ホイダッテ77ダニ↑a。恥ズカシイジャンネエ。」(「それだって、77歳だよ。恥ずかしいじゃないねえ。」)
　中略
A：「何ニモ苦ガナイカネ。オイチャンハ。」(「何にも苦がないかね。おじちゃんは。」)
B：「ウウン、ソンナコトナイヨ。寅年ダデネ。」(「ううん、そんなことないよ。寅年だからね。」)
A：「ア、トラ。」(「あ、寅。」)
B：「ゴージョーダニ↑b。エエ。」(「強情だよ。ええ。」)
(2)(被験者番号4(A)、5(B)の談話資料より)
A：「ウチノネー、前ノウチガ飼ッテンダヨ、牛ヲ。」(「家のねー、前の家が飼っているんだよ、牛を。」)
B：「牛ヲ↑。」(「牛を↑。」)
A：「ウン。」(「うん。」)
B：「スゴイー。」(「すごいー。」)
A：「ダモンデ、チョット近クニアルンダヨ。」(「だから、ちょっと近くにあるんだよ。」)
B：「田舎ダネー。」(「田舎だねー。」)
A：「エエー、違ウヨ。ソー、ダモンデネ。」(「ええー、違うよ、そう、だからね。」)
B：「ウン。」「うん。」
A：「風向キガ悪イト、チョット臭インダヨ。」(「風向きが悪いと、ちょっと臭いんだよ。)
B：「ソレハアルネー。」(「それはあるねー。」)
A：「食べ物ニ臭イガシミツイチャウ。」(「食べ物に臭いが染み付いちゃう。」)
B：「イインダヨ、自然ノ香リデ。ソレガ一番。」(「いいんだよ、自然の香りで。それが一番。」)
A：「ソー、チョットツライニ↑c。ツライ。」(「そう、ちょっとつらいよ。つらい。」)

(1)のAとBは40年来のつきあいである。また(2)のAとBは高校の同級生である。(1)のaでは話し手(B)は夫がカラオケをやっている事に対して恥ずかしいと思っているわけだが、聞き手(A)はそう思っていない。そこで、話し手(B)の夫の年齢をおよそ知っているはずの聞き手(A)に「もう年齢が年齢なんだから、カラオケをやるなんて恥ずかしいという感情をあなたも分かってよ」という心理が働いていると思われる。

(1)のbでは、長い付き合で、夫の性格を分かっていてもいい聞き手(A)が案外分かっていないことに抵抗して、「寅年生まれで、実は強情なのよ。分かってよ」という心理が働いている。(2)のcでは、話し手(A)が牛の臭いの被害について具体的に説明した後、聞き手(B)が「自然の香りでいい」と発言したので、「牛の臭いに悩まされて

いるこの気持、説明もしたし、あなたなら分かってくれてもいいでしょう」というような心理が働いていると考えられる。

このように「ニ↑」の付加した発語には聞き手の無理解に対する話者の心理的な抵抗が感じられるのに、馬瀬（1980：240））が「ニ↑」は「軽い敬意と親愛の気持を込めて余情を含む確認を表す」と記述していたり、福沢（1980：388－389）が「強引な主張ではなく、愛嬌であり、哀訴である」と記述しているのは何故であろうか。「共通認識を持ってしかるべき」という意識を話者が持つには、聞き手との間の経験、知識、常識の共有などがなければならない。（1）の例で言えば、聞き手（A）が夫の年齢や夫のひととなりをある程度知っていることが「共通認識を持ってしかるべき」と話し手（B）が考える根拠になっている。そしてこのような認識を持つ相手というのは親しい間柄である場合が多い。親しい間柄であれば、当然相手に対する自分の心情の理解への期待も高まると思われる。このようなことから「ニ↑」は親愛の気持や、愛嬌、哀訴などが込められていると解されたと思われる。更に上昇調で発音することにより、「主張」の持つ強さが抑えられ、最終判断を聞き手に委ねているようなニュアンスになる。それも親愛、哀訴、愛嬌のある発話という印象を与えていると思われる。

（1）、（2）の「ニ↑」は「ヨ」にも置き換えられる。「ヨ」の意味は、ほぼ共通語の「よ」に対応すると考える。「ヨ」は、蓮沼（1995：391）に則って「認識上、何らかのギャップが存在する文脈[3]で、認識能力の発動を促し、認識形成を誘導する標識」としておく。「認識上、何らかのギャップが存在する文脈」で用いられることは「ニ↑」と似ているが、「ニ↑」のように、聞き手の認識の欠落に関する心理的な抵抗、相手の理解に対する期待などの含みは感じられない。それは、話者が当該の事項を「聞き手も認識してしかるべき」と意識していないことに起因すると思われる。

3－3．説得・励まし

「ニ↑」の意味から、聞き手の認識を変えるという場合にもよく用いられる。たとえば（3）のような説得の機能として用いられると、聞き手（A）は熱があるという認識を保持しているはずだという根拠（例えば、その前に熱を計り、熱があることを知っている等）があるにも関わらず、それを認識していないので、話し手（B）が認識を要求していることになる。場合によっては非難のニュアンス（「いいかげん、認識せよ」）を帯びる。「ニ↑」の付加された発話は、このように感情的なニュアンスが強い。それに対して「ヨ」は、認識のギャップを埋める働きをすることから、同様に説得の機能はあるものの、聞き手も「認識してしかるべき」という意識がないので、相手への働きかけは弱くなる。

（3）A:「今日、学校へ行ク。」

B:「オメーハ熱ガアルンダ<u>ニ</u>↑。行ケルワケネーラ。」

B:「オメーハ熱ガアルンダ<u>ヨ</u>。行ケルワケネーラ。」

（A:「今日、学校へ行く。」

B:「お前は熱があるんだよ。行けるわけがないだろう。」)

（4）のように「ニ↑」が励ましとして用いられると、期待を込めた励ましとなる。これも話し手（B）には、聞き手（A）が認識してしかるべきという根拠（運動神経がいい、前転そのものが難しいものではない）があった上で、共通認識を要求していることになる。「何でそんなこと言うの。あなたならできるよ」というような話者の聞き手に対する心理的な抵抗と期待が感じられる。「ヨ」を用いた発話も励ましの機能を持つが、「ニ↑」の持つ心理的な抵抗や期待などの含みはない。

（4）A:「マネックリナンテ　デキンヨ。」
　　B:「デキンコトナイニ↑。チョット　ヤッテミラシ。」
　　B:「デキンコトナイヨ。チョット　ヤッテミラシ。」
　（A:「前転なんてできないよ。」
　　B:「できないことないよ。ちょっとやってごらんなさい。」)

3－4．勧誘

勧誘の機能を持つ「ニ↑」の付加された発話は、「状況を聞き手は認識していないが、認識するべきだ」という場面でも用いられるので、例えば（5）の場合、帰るべき状況（もう既に長居をしているとか、電車の時間に間に合わないなど）があるにもかかわらず、それを認識していない聞き手に認識を促しているという意味になる。帰るべき状況は聞き手も認識できるはずだと話し手が考えている事から、口調によっては非難のニュアンスを帯びることになる。

「ヨ」を付加した発話でも同様の機能があるが、相手に対して、「帰るべき状況を認識できるはずなのに、認識していない」というような意識はない。従って、「ニ↑」の付加された発話よりも相手への働きかけは弱くなる。

（5）A:「サア、ヘー帰ルニ↑。」(「さあ、もう帰るよ。」)
　　A:「サア、ヘー帰ルヨ。」　(「さあ、もう帰るよ。」)

3－5．情報提供

以上の機能では「ニ↑」と「ヨ」とは互換性があった。違いが顕著になるのは（6）のような例である。

（6）A：「ドウシタノエ。」(「どうしたの。」)
　＊B：「足クジイタンダニ↑。」
　　B：「足クジイタンダヨ。」(「(私は／あの人は）足を捻挫したんだよ。」)
　　「足クジイタンダヨ。」(「(きっとあの人は）足を捻挫したんだよ。」)

「ヨ」の付加された文は二つの可能性が考えられる。情報を提供する意味と推量判断を

行う意味である。情報を提供する意味と解釈すれば、足を捻挫した人が話し手自身か第3者である場合であり、推量判断の意味と解釈すれば、足を捻挫した人は第3者になる。

「ニ↑」については少し複雑である。聞き手（A）が何も知らない状態で質問したとしたら、その答えとして「ニ↑」の付加された発話は不自然となる。ところが（7）の例では「ニ↑」の使用は極めて自然である（下記の例では機能が疑問―情報提供から非難―言い訳の機能にずれこんではいるが)。

（7）A：「ドウシタノエ。トビッコ　オソカッタジャン。」
　　（「どうしたの。徒競争遅かったじゃない。」）
　　B：「足クジイタンダニ↑。ショウーガナイジャン。」
　　（「(私は／あの人は）足を捻挫したんだよ。仕方ないじゃない。」）
　　（「(きっとあの人は）足を捻挫したんだよ。仕方ないじゃない。」）

上記では聞き手（A）が、話し手B（または第3者）が徒競争が遅かったことまで言及していることから、その場にいて足を痛めたことを知っていたことが明らかである。つまり聞き手が認識してしかるべきだと判断する根拠が話し手側にあるので「ニ↑」の付加が自然となる。このように「ニ↑」の使用に際しては、「認識してしかるべき」という文脈が不可欠である。それに対して「ヨ」は話し手と聞き手の認識のギャップがある場面では常に用いられるので、このような条件に左右されることなく、自然に使用されると考える。

3－6．独　話

「ニ↑」は以上のように常に話し手と聞き手との関係性において、用いられるものである。従って独話などには全く用いられない。この点でも「ヨ」と異なりを見せる。

（8）(外を一人眺めながら、呟く)
　　＊コノブンジャ明日雨ダニ↑。ゲートボール大会ハ中止ダナア。
　　コノブンジャ明日雨ダヨ。ゲートボール大会ハ中止ダナア。
　　（このぶんじゃ、明日は雨だよ。ゲートボール大会は中止だなあ。）

4．「ジャン」との比較

4－1．「ジャン」の意味

「ニ↑」と「ヨ」が、話し手と聞き手の認識にギャップがあることが前提であるということは「ジャン」と比較すると、さらに明らかである。「ジャン」は聞き手の認識と話し手の認識・状況とが一致していることを前提として、話し手が当該の事項について、聞き手に共通認識の形成を要求する側面があると思われる。つまり、認識の見込みにおいて「ジャン」は「ニ↑」と「ヨ」と全く対極にあるのである。

4－2．共通認識の確認（押し付け）

上記の意味が最も反映する機能は共通認識の確認（押し付け）の用法である。以下は談話資料からの抜粋である。

(9)（被験者番号3の談話資料より）

「コノコゾー、コノコゾート言ッタ、ヨク言ッタ**ジャン**。コノ子供ノコトヲ、コゾー、コゾー、コゾーッテ言ッタネ↑」

(「このコゾー、このコゾーと言った、よく言ったじゃない（か)。子供のことを、コゾー、コゾーって言ったね。」)

(10)（被験者番号3の談話資料より）

「ヘソクリジャネーンダケド、ソノ、アノ、××銀行アタリデ、財形チュッテ、メッタヤットタ**ジャン**。」

(「へそくりじゃないけれど、その、あの、××銀行で、財形貯蓄と言って、よくやっていたじゃない（か)。」)

（9）では話し手が子供のことを方言で「コゾー」という言い方をしていたことを聞き手も知っていると想定していることを示している。また、同じく（10）では××銀行で財形貯蓄を頻繁にやっていたことを聞き手も知っていると話し手が想定していることを示している。実際には聞き手は知らない可能性もあるわけだが、「ジャン」が使用されることによって、聞き手は話し手と認識において同じ土壌に立たされた気持になる。「ジャン」のこのような性質から、話題を導入する時によく用いられる。

4－3．主張

「ジャン」が既出の（1）、（2）のような場面で用いられると、ニュアンスが違ってきたり、不自然になったりする。（1）では、「あなたも知っての通り強情でしょ」という共通認識の確認（押し付け）のニュアンスになってしまう。（2）は共通の認識が損なわれていることが明らかであるので、「ジャン」の使用は不自然である。

（1）'A：「何ニモ苦がナイカネ。オイチャンハ。」
　　(「何にも苦がないかね。おじちゃんは。」)
　　B：「ウウン、ソンナコトナイヨ。寅年ダデネ。」(「ううん、そんなことないよ。寅年だからね。」)
　　A：「ア、トラ。」(「あ、寅。」)
　　B：「ゴージョー**ジャンb**。エエ。」(「強情じゃない。ええ。」)

（2）'A：「食べ物ニ（牛の）臭イガシミツイチャウ。」(食べ物に（牛の）臭いが染み付いちゃう。」)
　　B：「イインダヨ、自然ノ香リデ。ソレガ一番。」(「いいんだよ、自然の香りで。それが一番。」)

A：「＊ソー、チョットツライ**ジャンc**。ツライ。」（そう、ちょっとつらいよ、つらい。）

4－4．説得・励まし

「ジャン」は説得とか、励ましとしても使用されうる。「ジャン」は相手との共通認識が前提となっているので、例えば既出の（3）’の場面で用いられると、「熱のあることは先刻承知だよね。だったら行けるわけがないだろう」というような意味になり、聞き手（A）の過去における認識を引き出し、再認識を迫ることになる。（4）’では「ジャン」を使用すると、聞き手（A）が過去において、前転に成功していたような含みが感じられ、それを再認識するように迫っているようなニュアンスがある。いずれも断定的な響きがあり、それ故反論を許さないような強い説得、励ましとなる。

（3）’A：「今日、学校へ行ク。」

B：「オメーハ熱ガアルン**ジャン**。行ケルワケネーラ。」

（「お前は熱があるんじゃない（か）。行けるわけがないだろう。」）

（4）’A：「マネックリナンテ、デキンヨ。」

B：「デキンコトナイ**ジャン**。チョット　ヤッテミラシ。」

（「できないことないじゃない（か）。ちょっとやってごらんなさい。」）

「ニ↑」はそれに対して、上昇調で発音されることからも、断定的なニュアンスはなく、常に最終的な判断は聞き手に委ねるニュアンスがある。それ故「ジャン」と比較すると相手に対する働きかけは弱くなる。

4－5．勧誘

「ジャン」が勧誘の機能に用いられると、話し手は聞き手も同意していると想定しているので、認識の欠如に対する非難めいたニュアンスがない。しかし異論を挟む余地を与えない断固とした姿勢が感じられる。（5）’では相手も「帰る」という認識に立っていると話し手が考えていることを示している。

（5）’A：「サア、ヘー帰ル**ジャン**。」（「さあ、もう帰るよ。」）

4－6．情報提供

聞き手の疑問に対して情報を提供する時に使用する「ジャン」の付加された発話は、実際に相手の共通認識を前提としているので、「分かっているはずのことを、どうして今さら聞くのだ」という意味になる。つまりここでも当該の事項について全く知らない相手に情報を提供するという機能はない。主体は本人と第3者が可能である。（6）’で言うと、ギブスか何かをしている聞き手（B）に話し手（A）が驚いて「どうしたの」と聞き、それに対して聞き手（B）が相手に「私が足を捻挫したことは、先刻承知でしょう？なに分

かりきったことを聞いているの」という意味となる。また、ギブスをしているのが第3者の場合も同様に、「あの人が足を捻挫したことは、先刻承知でしょう？なに分かりきったことを聞いているの」という意味になる。

（6）’A：「ドウシタノエ。」（「どうしたの。」）

B：「足クジイタン**ジャン**。」（「（私が／あの人が）足を捻挫したんだよ。（なに分かり切ったこと聞いているの？）」）

また推量判断は成り立たない。実際「ジャン」は推量を介さず、常に断定的である。このことは「ジャン」が、「きっと」、「たぶん」などの副詞と共起できないことでも分かる。

＊「キット・タブン足ヲクジイタン**ジャン**。」（「きっと／たぶん足を捻挫したんだよ。」）

4－7．独話

「ジャン」は「ニ↑」と違い、独話に用いることもできる。「ジャン」は、話し手の新しい知識を吐露する意味があり[4]、それが独話に用いられる理由であると思われる。

（8）’（外を一人眺めながら、呟く）

コノブンジャ明日雨**ジャン**。ゲートボール大会ハ中止ダナア。

（このぶんじゃあ、明日は雨じゃないか。ゲートボール大会は中止だなあ。）

5．まとめ

以上の結果を表にまとめると、表1のようになる。

【表1】

機能・独話	ニ↑	ヨ	ジャン
（認識が損なわれている場面での）主張	○	○	×
説得・励まし	○	○	○
勧誘	○	○	○
情報提供【相手に当該の事項に関して全く認識がないことが明らかな場合】	×	○	×
独話	×	○	○

○はその機能として使えること、×はその機能として使えないことを示す。

「ニ↑」と「ヨ」は「話し手と聞き手の認識にギャップがある文脈で用いられること」が前提となっている点で、その機能にも重なる点がある。しかし「ニ↑」は認識のギャップはありながらも、「聞き手は認識してしかるべきである」という文脈で用いられる点で「ヨ」とのニュアンスの違いがうまれる。「認識してしかるべき」と話し手が考える根拠として、聞き手が当該の事項に関して既に何らかの共通知識を有していたり、話し手の心情を理解できるような立場にいたりすること等があげられる。認識が損なわれている場面で

「主張」、「説得」、「勧誘」などで「ニ↑」が用いられると、「あなたなら認識してしかるべきなのに、どうして認識してくれないの、いいかげん認識せよ」という聞き手の認識の欠如・無理解に対する話し手の心理的抵抗が感じられる。それ故時として非難のニュアンスを生むが、逆に「励まし」のような機能として用いられた時は、「あなたなら認識できてしかるべき」というのは、聞き手に対する期待にもなり、相手を励ましたいという強い思いの表現にもなる。「ヨ」は同様の機能を持っていても、そのような感情的なニュアンスは生まれない。「認識してしかるべき」という意識は「ヨ」にはないからだと考える。「ヨ」は「認識上、なんらかのギャップが存在する文脈」では常に使用が可能である。また、認識のギャップの中には聞き手との認識のギャップだけでなく、状況や自分の前の知識などとのギャップも含み、それ故独話にも用いられると考える。「ニ↑」は「ヨ」や「ジャン」と違い、独話に用いられないことからも、対話の中でしか用いられない終助詞であるということが分かる。つまり常に伝達態度のモダリティの顕在化した終助詞であると言える。 「ニ↑」と「ヨ」のこのような「話し手と聞き手の認識にギャップがある文脈で用いられること」が前提となっている点は、それと認識の見込みにおいて対極にある「ジャン」の意味を考えると更に明確になる。「ジャン」は話し手の認識と聞き手の認識が一致しているという前提の下に、聞き手に同様の認識形成を要求する標識である。「説得・励まし」、「勧誘」の機能では「ニ↑」との互換性があるが、そこから醸し出されるニュアンスは全く違う。「ジャン」が「説得・励まし」、「勧誘」の機能として用いられると、相手も当該事項に関して認識していたことを前提としているため、断定的なニュアンスが強く、異論を挟めない強さがある。また「情報提供」でも「ヨ」や「ニ↑」の付加した発話は推量判断とも解されるが、「ジャン」の付加した発話は推量を介さず、事実として提示される。また、独話にも用いられることから、状況と話し手の認識の一致の際にも用いられ、常に対話に用いられるわけではないことが分かる[5]。

6．おわりに

本論では、「ニ↑」の持つすべての機能を網羅できたわけではない。また「ヨ」や「ジャン」に関しては「ニ↑」との相違に焦点をあてて論じたため、それぞれの固有の機能についての検討は不十分である。今後の課題にしたい。

謝　辞

談話資料の提供者の皆様には忙しい時間をさいて、調査に協力くださいましたことを、ここに心より感謝申し上げます。

注

1）長野県上伊那地方は地理上は南信地方に属する。南信地方は大きく諏訪地方と伊那地方に分けられ、伊那地方は更に下伊那地方と上伊那地方に分けられる。馬瀬（1992：448）は上伊那地方の大田切以北は方言的には中信方言に属するとしている。つまり、上伊那地方は中信方言と南信方言の境界にあると言える。

2）談話資料の被験者の情報は以下である。

被験者記号	出　身　地	資料収集年	資料収集年の年齢(性別)
1	長野県伊那市	1992	69歳（女）
2	長野県伊那市	1992	72歳（女）
3	長野県上伊那郡飯島町	2005	70歳（男）
4	長野県上伊那郡箕輪町	1992	17歳（女）
5	長野県上伊那郡辰野町	1992	17歳（女）

3）「認識上のギャップが存在する文脈」とは、当該の事態に気がついていないとか、忘れているといった理由で、話し手または聞き手の側に認識の欠落が生じている状況や、両者の間に情報の把握や発話意図の解釈をめぐって、食い違いや無理解が生じている状況をさしている（蓮沼、1995：391)。

4）蓮沼（1995：400）は「じゃないか」の基本的な意味として「話し手の知識獲得の詠嘆的表明」をあげている。「じゃないか」と「ジャン」には共通点も多いと思われるが、「ジャン」が推量に伴う副詞等を共起しないのに対し、「じゃないか」は共起が可能である。

「たぶん、足を捻挫したんじゃないか。」

*「タブン、足ヲクジイタン**ジャン**。」

5）これは「ジャン」が伝達態度のモダリティだけでなく、認識的モダリティも持っていることを示唆すると思われる。それは「ジャン」が方言終助詞、「ネ」、「ヨ」、「カ」、「ナア」などを下接することからも窺がえる。詳しくは蓮沼（1995：407）参照。

参考文献

井上　優　1995　方言終助詞の意味分析　―砺波方言の「ヤ／マ」「チャ／ワ」―　国立国語研究所報告110　研究報告集16

徳川宗賢監修　1989『日本方言大辞典』　小学館

中村純子　1996「伊那方言における方言保持の男女差」『日本語研究』第16号　東京都立大学国語学研究室

仁田義雄　1989　「現代日本語文のモダリティの体系と構造」『日本語のモダリティ』　くろしお出版

福沢武一　1980　『ずくなし　上巻　上伊那の方言』　伊那毎日新聞社

馬瀬良雄　1980　『長野県上伊那誌民俗編、下』　上伊那誌刊行会

Lakoff, R. 1975　Language and women's place. New York:Haper & Row, Publishers